

思い入れの木に育まれたみどりを慈しむ心

深谷 恒生 福島県石川郡 八十一歳

両親が亡くなり、子供たちも巣立ったわが家は、老夫婦だけが広い家に取り残された。そんな二人の心を癒してくれるのが、家の周囲を取り囲んでいる庭であり、庭越しに運ばれてくる四季の彩りであり、香りである。

庭の木々の中にはそれぞれの思い入れがあり、年輪と香りを通して、植樹者の息吹きを感じ、思いを巡らすことができる。祖父は日露戦争へ出征した時の記念樹として、家紋にちなんで梅の木を植えた。樹齢約百二十年になる今も、庭の東側に古木として荘厳な風格をそなえ「俺は、日露戦の戦士だぞ」と、誇らしげに微笑んでいるようである。祖母は、子や孫に柿を食べさせたいと、甘柿と渋柿の木を庭の奥まったところに植えた。今では庭の背景として、秋には実をつけた柿が庭に彩りを添えている。そして父は、好きな牡丹を囲炉裏の間から見える隠居家の前庭に植えた。大輪の咲く頃には、雨でも降ろうものなら花に傘をさすという懲りようであの珍光景はなんとも言えない庭の滑稽さを出していた。母は、五月節句の柏もちの葉にと柏の木を植えた。今では子や親戚、知人までが重宝がって利用、母の思いがお裾分けされている。

それぞれの木は年輪を刻み、四季を通して家族の心を癒しながら、植樹者の思い入れを伝えてきている。家と庭が一体化した中で、家族は自然との触れ合いを通してみどりを慈しむ心を育んできたのではと、心密かにひとり合点しながら故人に思いを馳せている。